

終える命

つなぐいのち

國森
康弘

第
2
回

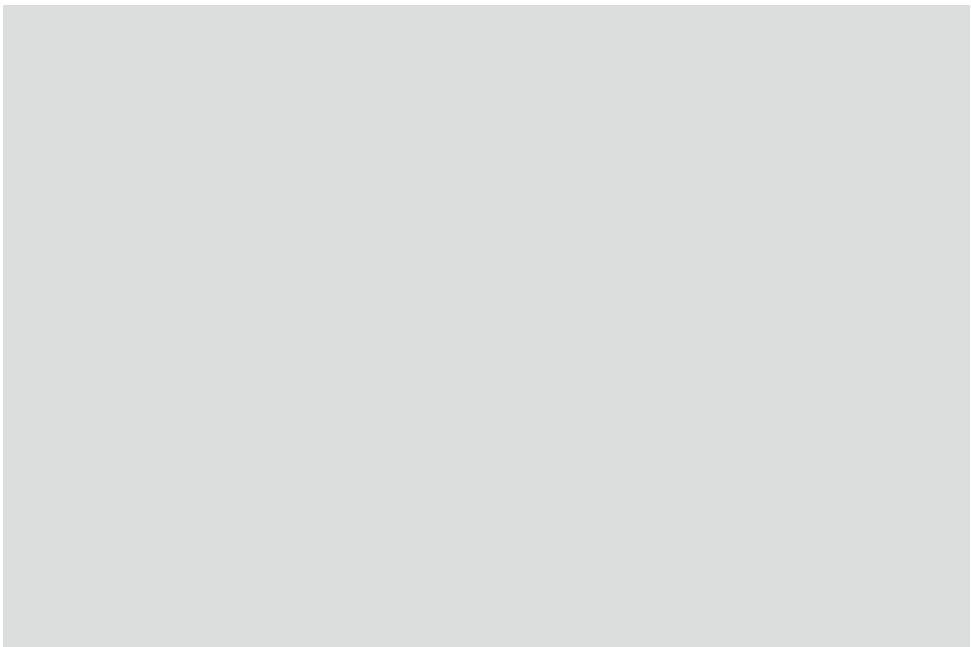
「こうちょうしつ」から
「ほけんしつ」へ

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

朝おじいちゃんに「行ってきます」って、登校した。
さよなら、したくない。

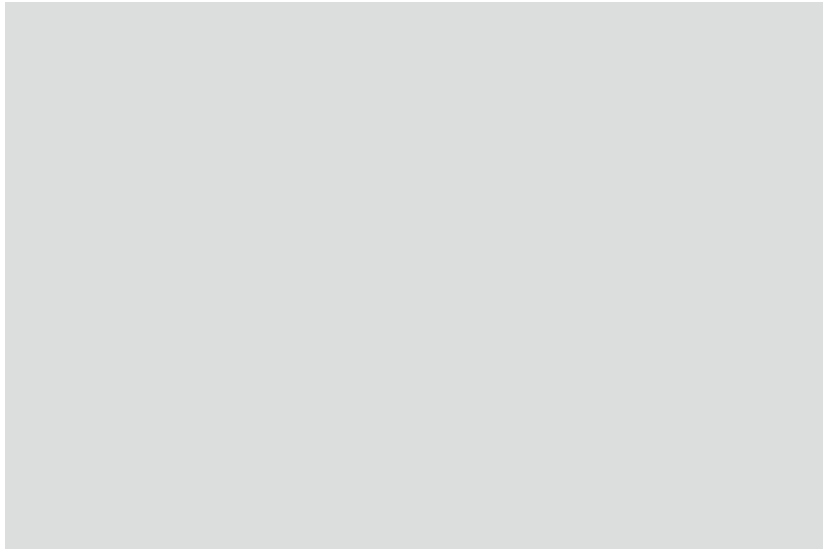
孫の手が何よりの薬。

「おじいちゃん」



息を引き取る何時間か前。優しいほほ笑みを家族に残してくれた。

これからも一緒に生きていこうね、
おじいちゃん。



と

おくにいつちゃったおじいちゃん。帰って
くることはないけれど、私の心の中には
ずっといるよ」

祖父を看取ったみずきちゃんは、後にそう言った。

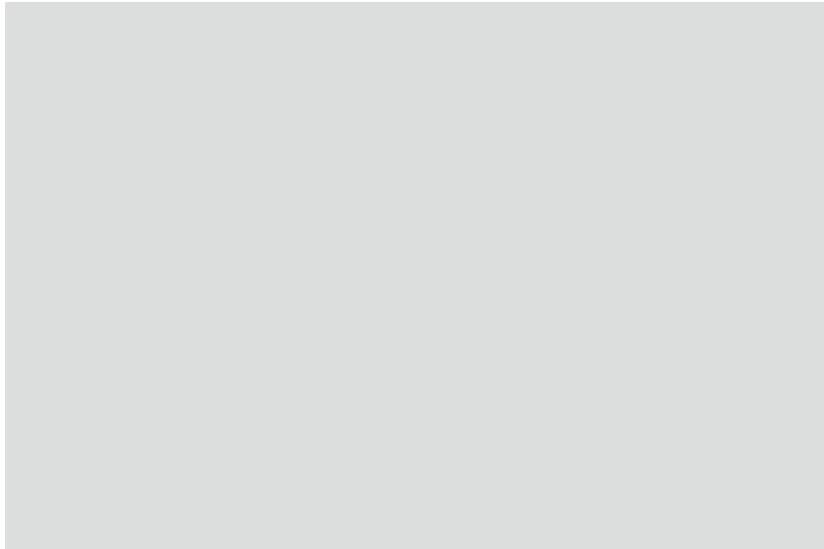
田畑が広がる滋賀県東近江市の一角の自宅に、3世代
で暮らしていた。最年少のみずきちゃんは、文字どお
りの「おじいちゃんっこ」。肺気腫で寝込む清さんの
ベッドに飛び乗り、宿題したり読書したりと、そばに
びったり。冬休みには、おもちゃのピアノを祖父の寝
床の横に置き、一緒に歌おうと促した。

孫娘の願いとあつては、断れない。息をするのも苦
しい体で、肩を上下させながら声を絞り出す。訪問診
療に來た永源寺診療所の花戸貴司医師も、ドクターズ
トップをかけずに見守った。しんどくても満足そうな
表情が、そこにはあった。

ある時期まで、清さんが過ごす部屋の入口には「こ
うちようしつ」という貼り紙があった。みずきちゃん
が、大切な祖父の存在を、そう位置づけていたのだ。

花戸医師は訪問診療をするたびに、尋ねる。「病院
に入院したいですか」。清さんはいつも、たとえ肺炎
にかかったときでも、首を横に振って

「やめよう、いの家じ」



と答えていた。家族も、そのやりとりをよく聞いている。清さんの妻みち子さんは「この人は、みずきといるときがいちばん落ち着くから」と、目を細めて夫と孫を見やった。

病気は進行していった。酸素の管を鼻に通しながら、目を閉じ、苦しそうに息をする。「だいじょうぶ？」とみずきちゃんが、祖父の背中をさすると、清さんは顔を上げて、ほほ笑みを返した。いつしか、部屋の貼り紙は「ほけんしつ」に変わっていた。

食事がのどを通らず寝てばかりの清さんに、花戸医師が改めて入院したいか確認すると、やはり首を横に振った。みずきちゃんがそばにいる、この自宅こそが生をまっとうする場所だった。1週間後、この世での呼吸を静かに終えた。

清さんは、息を引き取る数時間前から、ほほ笑むような表情を浮かべていた。まるで、背中をさすったみずきちゃんに笑みを返したような……。息が止まったあとも、きれいで優しい顔だった。みずきちゃんは、冷たくなっていく体を拭いた。

心の中にいるおじいちゃんと一緒に、大切に生きていく……。みずきちゃんは、清さんから何かを、受け取った。
〈滋賀県東近江市にて2010〜2012年に撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。